

門と倉

第一部 豪農小塩家屋敷

- 屋敷前の堀（２）
- 菖蒲の花（３）
- おこじゅう（５）
- 初節句の大凧あげ（７）
- 稲藁の風景（８）
- 菊田や（１０）
- 八王子往還（１２）
- 渡船小屋（１４）
- 八幡神社のお祭り（１６）
- 田村用水堀（にしかわ）（２０）

第二部 稲藁の籠

- 稲藁の籠（２２）
- 外便所（２５）
- 稲こぎ（２６）
- 柿の木の風景（２８）
- 母の面影（３０）
- 離れの部屋（３２）
- キャンデーやさん（３４）
- 相川村役場（３７）
- 麦踏み（３９）
- 蝉（４０）

第三部 うなぎや

- うなぎ池（４１）
- 籠かきの伝説（４３）
- 加賀屋敷（４５）
- 相模川堤の松林（４６）
- 慟哭・本所被服廠（４７）
- 授業参観（４９）
- 戦死地点・正陽関（５０）
- 海軍火薬廠会計部（５１）
- 戦後史の一ページ（５３）
- 相川診療所開設（５４）

第一部 豪農小塩家屋敷

屋敷前の堀

すでに今はないその風景は
幼い頃に見た風景

かつて戸田の地にあった
豪農小塩家の屋敷
黒塗りの塀に囲まれた
大きな門と屋敷のなかにあった倉
豪農であることの象徴であった
門と倉
周囲に巡らされた塀の外側に
小さな用水堀が流れ
シダの葉が茂った堀には
ザリガニやどじょう鯰などがたくさんいた
幼い子どもたちにとって
堀は 何と
魅惑に満ちたものであったろうか
屋敷のまわりにあるケヤキの巨木の
枯れ葉が その堀に落ち
どじょうや鯰が潜んでいた
モジリさえも仕掛けられていた堀

祖母に手を引かれて歩いた
小塩家周辺の道
堀を覗くとザリガニが
堀の端の壁にへばりついていた
胸躍る時 咄嗟に
横這いになり 壁に張り着いた
ザリガニを手で掴もうとした瞬間に
頭から堀に落ちてしまった

その時祖母は

「ほら 一人で這い上がってここまで来い」と
何一つ手を貸そうとしなかったとあとで聞いた
泥だらけになって
這い上がったおれは
祖母の胸に抱かれた
幼い頃の出来事

門の前から中に入ると
そこは一面の砂利
眼に飛び込んで来たのは
赤や黄色のマツバボタンの花

夏が終わってうず高く積まれた稲藁の庭
ごろりと寝っころがって
見た青い空と
ぽっかりと浮かんだ白い雲
戸田の農村風景は
いまでも脳裏に焼き付いて消えない

菖蒲の花

すでに今はない
記憶の底にある一つの風景

屋号「うなぎや」の名で呼ばれていた
岩崎家の
ちょうど真ん前にあった小塩家
表門の前から続いていた
カド（小塩家屋号）の農作業場に
掘り抜き井戸があった
ちよろちよると流れる井戸の傍らに

白や紫の菖蒲の花が
咲いていた
家の前の道沿いの堀へと水は
流れていたが
手前は浅く奥にはもう一つの掘り抜き井戸
その手前の浅く緩やかに流れる敷石に
座り込んで
いつまでもいつまでも水遊びをしていた
三、四歳の頃の
記憶の底にある風景
それも小塩家の風景の一つであった

掘り抜きの傍らに咲いていた
菖蒲の花
それは幼い頃に見た風景

カドの表門の前の広場は
子どもたちの格好の遊び場
堀の周囲にあった堀の
ザリガニ釣り ビー玉遊び
「小塩八郎右衛門」という
表札の掲げられた門の
横には大きく葉を伸ばした芭蕉が
植えられていた
その先端に白い花をつけていた
まるでバナナのような房が
ゆれていた
「このバナナの実はどうして？
何時まで経っても本物のバナナのように
大きくなるのだろうか？」と
不思議に思っていた
芭蕉は縁起のいい植物で
門や寺院に植えられているもので
決してバナナなどではない
そのことを知ったのは
ごく最近のことであった

不思議な気持ちで
背丈以上に伸びた芭蕉を見上げた
その時の奇妙な気持ちが脳裏から
離れない
掘り抜き井戸に
咲いていた鮮やかな菖蒲の花
幼い頃「うなぎや」に育ち
何も知らず
ただ無我夢中に遊んでいた頃の
小塩家周辺の風景

おこじゅう

豪農小塩家の屋敷は「にしかわ」と呼ぶ
田村用水堀の内側にあったが
「こうち」（耕地）と呼ぶ屋号の家は
にしかわの外 田圃のなかにあった
こうちの家の前の牛小屋は
牛の垂れ流す小便や
糞が堆く積まれていた
子どもの頃 にしかわを遊び場としていた
われわれは 牛小屋の前を通る時
「くせえ～」と叫びながら
鼻をつまんで 急ぎ足で
その場所を通り抜けた

用水堀は近世より水争いの
ながい歴史があったが
子ども時代には
そんな争いのことは知らず
こいみとバケツを持ち

用水堀にひそむ魚獲りに
夢中であった
用水堀は にしかわの外に
広大に広がる田圃へと
流れ込んでいた

「くせえ～」と叫びながら
前の道を駆け足で通り抜けた幼い頃の
風景が いま思い出される

昭和二十年代の頃は まだ
田植えの前のタウナイは牛が
主な動力で牛小屋は
家のあちこちにあった

「おこじゅうにするから
おまえもいくか」と祖母がいい
やかんを下げて 田圃へと行った
あの頃の風景は いまはない
稲の苗を田圃に放り投げ
泥だらけになった足を にしかわで洗い
にぎりめしを畦に腰かけながら食べた
幼い頃の風景
田圃に張られた水が太陽に照らされて
きらきりと 輝いていた
畦から中をのぞくと蛙などの
生き物たちがいっぱいいて
畦に沿ってどこまでも田圃が
続いていた

田植えの時季
「おこじゅうにするから
おまえもいくか」と
声をかけた祖母の声が懐かしい
「おこじゅう」などという言葉は
もう使う人はいない

稲藁に刻まれた 幼い頃の
小塩家周辺の農村風景

初節句の大凧あげ

すでに今はない
記憶の底にある一つの風景
屋号「うなぎや」の名で呼ばれていた
岩崎家の
ちょうど真ん前にあった小塩家
 祖父母たちも また
小塩家（屋号カド）との
深いつながりのなかにあった

小塩家の行事が
そのまま戸田中の行事となった時代の
寄生地主制下の
祖父母たちの風景
その一つの象徴であった小塩家の
 初節句の大凧あげ
いまもなお語り草になっている
昭和四年の出来事
祖父房吉にまつわる話

田の畦に突っ立てられた竹竿の先端の
手ぬぐいがパタパタとなった
「おお、いい風が吹いてきたか」
房吉は呟く間もなく
八幡神社へと走った
やがて 合図の法螺貝がなった
続いて 大太鼓が打ち鳴らされた

ドンドン ドンドン

「おお、酒が飲めるぞ」

男衆や村の若者たちは我先へと

小塩家へ 走った

一番うないから二番うないに入る

五月 相模川の河川敷であげられた

豪農小塩家の初節句の大凧あげ

初節句のお祝いの祝宴が

その夜行われたが その祝宴は盛大で

集まった村人たちに樽酒が振る舞われ

その日は厚木の芸者がいなくなったと

語り伝えられている

小塩屋敷の周囲に植えられた

樺の巨木の下には

酔っぱらった村の男たちが

転がって 眠っていた

日頃白いご飯さえ食べられない

小作人も

その日ばかりは無礼講であった

祖父房吉は その小塩家の大凧あげを

仕切っていた

相模川の河川敷であげられた大凧あげは

祖父たちの時代の戸田の風景

この地方にあった初節句の

習わしであった

稲藁の風景

トロッコ遊びに興じていた幼い頃

納屋には 脱穀機や唐箕
縄織い機などが
所狭しと 置かれていた
縄織い機のラッパのような大きな口が
二つ こちらへと向けられていた
その昔 父が編んだという筵や俵
縄や草履 いちっこ おはち入れなど
稲藁は
百姓の暮らしには欠かせなかった
遠い稲藁の風景

祖母がかまどに稲藁をくべ火吹き竹で
火を起こしていた姿など
もうすでに忘れかけていた
土間のでいどこの傍らには
掘り抜き井戸があり西瓜や茄子などが
ふかふかと浮かんでいた夏の風景も
ほんの少し前の父母たちの時代なのに
すでに遠い昔の風景となった
「なんみょうほうれんげきょう」
毎朝 田圃を見回りに歩く
寛蔵（小塩八郎右衛門）じいさんの
「みんな早く起きて野良に出ろよ」
という合図のお経よりも
祖父房吉は 早く野良に出て
働いた
だが そんなに働いてえた米さえも
肥料代を支払うと
殆ど手元に残らなかったという
「この辺の百姓はなあ、みんなカドの小作
人だな。昔の百姓はなあ、小作料をはらっ
ちまうと、あとに何も残らない。だから私
なんぞ家を支えるために奉公に出て働いた。
うなぎやの地所も、昔はたあんとあつたが
みな、カドの質に入ってしまったって無くなっ
た。この辺の百姓はみんなカドの小作人だ

よ。」

祖母たちの昔話

カド（豪農小塩家）にあった米倉には
穫れ秋には三〇〇〇俵とも五〇〇〇俵とも
いわれる小作米が運び込まれたが
その俵のシメナオシやクラビラキには
戸田の力自慢の男たちが駆り出され
俵担ぎの「力技」を競い合った
その男たちのなかに祖父たちがいた
祖父たちの代から父たちの代まで
毎年行われた この年中行事は
大地主制下の
富と権勢の象徴が門と倉であったのだが
これほどの富と権勢を誇ったカドの
門と倉も 今はない

お盆の時の送り火や迎え火にも
稲藁を燃やした
ぱちぱちと音をたてて燃える赤い火が
夕暮れの薄暗い闇のなかで
ひときわ赤く輝いていた
幼い頃に見た風景

菊田や

雲のまにまに 光りは差し込んでいたが
その日は雨であった

雨で 野良に出ない時は
祖父房吉は人力車の発着所で
立場ともなっていた茶屋

菊田屋に出かけた
戸田の渡船場口となっていた
この場所は
房吉が憩う場所であった
俵担ぎの力技を特技とした祖父も
尺八や「月琴」を弾き
発句も嗜んだが
特に 浪曲や講談は得意であった
立場の茶屋であった菊田屋は
祖父の講談や月琴を聴くのを
楽しみに集まった村の年寄りや
若者たちの格好の社交場となっていた
ある時 菊田屋前の
大松山で隠れて
博打をやっていた人力車夫が二人
捕まったことがあったが
遺った一人の者を手配して逃がしたのも
祖父であった

俵担ぎも 小塩家の俵の締め直しにも
先頭に立って働いた祖父
大正九年衆議院選挙が行われたが
「小塩八郎右衛門の選挙の時は
下駄を何足も駄目にするほど
走り廻った」とは
いつもの祖父の口癖だった
それだけに カドは祖父の言うことを
無為にはできなかった
大神 太田 相川などに
小作人が五百数十人いたといわれた
カドの小作料は戸田の小作料が
基準となって決められたが
獲れ秋に
収穫量を量るための坪刈りが
田毎に行われた
そして 小作寄合が開かれ

カドとの小作料の交渉をやるのは
祖父の役目だった
「カドの屋敷に誰も行きたがらねえ
だから 俺が行くしかねえ」と
これも口癖だった祖父
今とは違い当時の反当たりの収穫量は少なく
上田でも五～六俵といわれていた
暗渠排水が行われない前の田は
ずぶずぶと足が入る沼田が多く
水はけが悪かった
坪刈り 小作寄合 暗渠排水
小作米納入時の 穀物検査員
七～八月出荷米として出される前に
倉を開けるクラビラキ
緩んだ俵を締め直す正月行事の
タワラのシメナオシ
剰余米での酒造り
小塩家（カド）の行事と風景は
祖父房吉の面影に 重なっていた

その稲藁の風景も
流れる雲のように
いつしか遠くへと走り去った

八王子往還

おおかみごぼう とだにんじん
さかいとんばら やぶぎつね
（大神牛蒡戸田人参
酒井頓原藪狐）注1

八王子往還（平塚道）が

大神から戸田へとさしかかり
大きく曲がる所
そこに「戸田の大松」と呼ばれる
巨木の松が立っていた
松の枝は大きく伸び
その根は「大松の池」と呼ばれた
池の端へと入り込んでいた
この大松は 往還を通る人たちの
目印であった
往還は渡船場口の菊田屋を過ぎると
地名を「くらのやしき」と呼ぶ
小塩家（カド）の屋敷にさしかかる
渡船場口の菊田屋には
馬をつなぐ杭が打ち付けられ
そこには数頭の馬がつながれていた
大山詣でのお客を乗せる
人力車夫たちも
とれたての鮎を肴に
酒を酌み交わしていた
夜は「おいはぎ」が出ると恐れられ
狐に化かされた話もあるほど
寂しい道であったが
狐やムササビにとっては
格好の棲み家であった
松のまにまには帆掛け舟が行き交う
八王子往還は
子易の森と呼ばれた神社を過ぎると
「酒井頓原」と謡われた頓原に出る
祖父母たち時代の
八王子往還

幼い頃 祖母に手を引かれ
真っ先に出かけた菊田屋
「すみよしや」（旅籠や）の屋号をもつ
隣家でも お茶を飲んだ
開き戸を開け土間を通り中に入ると

そこが板の間で 板の間に腰を下ろして
出されたたくわんを食べた
「畑に行くよ」と祖母に言われ
リヤカーの後ろに乗っかり
相模川の河川敷にある畑に出かけた
畑で草を筆りながら
祖母の話す昔話を聞いた
「昌治がなあ、死んじまってよお」と
戦死した伯父（父の兄）の話が
いつも 最初に祖母の口から出た
その後で必ず出たのがカドの話であった
「カドはな、他人の土地を踏まずに
自分の土地だけで平塚まで行けた
大変な大地主で、な。
屋敷には女中部屋が幾つもあって」と
豪農小塩家（カド）にまつわる話になった
いまは 権勢を誇った地名「くらのやしき」
と呼ぶ 豪農小塩家の屋敷も
家々を屋号で呼んでいた 習わしも
ましてや 人力車夫たちもいない

帆掛け舟が行き交っていた
大松山と小塩家周辺の
戸田の風景が
確かに祖父母の時代にはあった

注 田村用水を引水する旧村（酒井・戸田・大神・田村・横内）を揶揄した古（俗）謡。
横内の「横内よろけて犬の糞」で終わっている。

渡船小屋

立場である菊田やの前の道を川に向かって

下って行くと
そこは「戸田の渡し」の渡船場（※1）
船が一艘 杭につながれていた
その近くに
松林に囲まれた
渡船小屋（番小屋）があった

小屋の入り口は二枚の雨戸で仕切られていたが
そこはいつも開けっ放しで
中に入ると 六畳ほどの板の間があり
囲炉裏が 切ってあった
その囲炉裏には いつもチョロチョロと
火が燃えていた
小屋の外には棹が 二本か三本
いつも立て掛けてあって
船頭が 詰めていた
「小僧来たか これをやるから食え」
と差し出された コガシと呼ぶ
大麦の粉を煎って砂糖でまぶしたものを
蝙蝠の図柄が描いてあるゴールデンバットの
切れ端で
口の中に放り込んでくれたという
船頭たち
串刺しの鮎が焼かれた
香ばしい匂いと
煙草の匂いが入り混じっていた
父母たちの子どもの頃の
番小屋の風景

渡船番帳（※2）というのがあって船頭の
順番が部落中の家々を廻っていた
祖父母たちの頃から
いつしか船頭が番小屋に詰めた
父母の時代へと時代は変わったが
鮎川と呼ばれた相模川の川遊びは
大松山の記憶と共に

父母たちの時代へと確かに受け継がれた
菊田や前の大松山で
博打をやって捕まった犯人が
人力車夫たちの仕業とわかったのは
ケットウ（※3）が大松山で見つかり
それが人力車夫のものであったという
証拠からで この博打事件も
もう遠い昔の
渡船場をめぐる事件の一つ

帆掛け船がゆったりと
松の間を行き交っていた
祖父母たちの記憶の底にある村の風景
それはもはや遠くへ流れ去ったが
確かに渡船場の風景が
そこにあった

- 米1 相模川の渡船場は主なもので二十三カ所あったが、そのうちの一つ。昭和十四年頃までであった。明治十一年頃の船賃は人一銭、馬一銭五厘、人力車一銭六厘。
- ※2 戸田の家々一三三軒の名が書かれた松板。それを各戸が輪番で廻り船頭に出た。震災後、特定の人が船頭に出た。
- ※3 人力車に乗るお客さんの膝掛けのこと。

八幡神社のお祭り

昭和三十年代の八幡神社（注）のお祭り
その日は お膳いっぱい料理が並べられ
親戚や近隣の人たちが 大勢集まって
賑やかであった
着飾ってお祭りに行く人たちの
声が 道の向こうから聞こえてきた

「もう、始まる頃だから
ぼちぼち行くか」と祖母が
声をかけた
筵むしろと座布団を抱えて
お祭りに出かけた
鳥居の前には二本の幟のぼりが立てられ
風に靡いていた
家々にはお祭りの灯明が灯され
境内の入り口には夜の屋台が
幾つも並び 大勢の子どもたちが
そのまわりに 集まっていた
御神楽殿の前の棧敷席には
筵が いっぱいに敷かれ すでに
大勢の人が座っていた
御神楽殿と本殿をつなぐ間には
渡り廊下がつくられ 芝居の役者の
出番を 待っていた
その時の芝居の内容は覚えていないが
境内いっぱい吊された電球が
きらきらと輝いていたことを
覚えている
もう 記憶の中にしかない
お祭りの風景

神社の南側の きんべいさん（屋号）の境
の長い塀に お祭りに使う幟の棹などが
収められていた
神社の境内で遊んでいる時にそれが何なの
かを 知った

「御神楽殿は大正三年まで組み立て式で、お祭りの当日に宮世話人の指図で村の若い衆が組み立てた。」

「お祭りの出し物は殆どがお神楽で、お神楽師の愛甲のユウ（剣持裕太郎）さんが神代神楽を演じた。お神楽は、昭和十四・五年で終

わった。」

「愛甲のユウさんという人はね。下分の寺（延命寺）に居られた。当時、寺が無住だったため、震災後一時留守番にいられていた。この寺で“手踊り”などを教えていて、よく寺に行った。」

「お祭りには必ずヤゴヒロ（屋号）のヒロ（鈴木広吉）さん（横笛の名手）が決まって横笛を吹いた。」と

「祝詞は^{のりよ}大山から来た神主の沖津さんがあげたが、祝詞代は一軒一合のお米と決められていて、持ち寄ったお米は全部で三斗九升五合になった。」と

「娘時分に、お祭りに出かけたが道端で見張りを立て、やったら捕まるサイコロ博打をやっている男たちを見て、恐ろしくて逃げ帰った。」という祖母の話

大正時代の祖父母たちの
記憶の中にあるお祭りの風景

敗戦後の農地改革まで中郡神田、太田、相川にまたがり、小作人五百数十人を擁していた県下第一の豪農小塩家

「大正から昭和にかけ、田畑二百町歩（六十万坪）を有し、神田村にある米倉二棟と自邸にも九十坪の米倉があって毎年五千俵の小作年貢米が入ったといわれている。年に一度、米俵の縄の締め直しに村の若者が出て、その際、こぼれた米が十数俵もあって、これを村の例祭やその他の費用に寄付してもらった」という。

豪農の象徴であった門と倉も

銅（あかがね）御殿と称された小塩家屋敷も いまはない

敗戦後の農地改革は

寄生地主を解体させたが
その一方で
村落共同体意識をも解体させたのか
村人の紐帯としての鎮守の祭りも
昭和三十年代を境にして一変した
祖母に手を引かれて見た最後の
お祭りの風景

(注) 八幡神社・由緒沿革

往古郷名「富田」とも記し、字中戸田の鎮守。「文和二年（一三五三）四月鎌倉八幡宮両界領に付されしも返進候条の事」と古書にみえ、慶安二年（一六四九）八月社領の御朱印賜った時、社地相模川の辺に鎮座したが、洪水でたびたび崩れてしまったので、文政十一年（一八二八）十一月旧別地内（延命寺）に遷したが、慶応三年（一八六七）五月二十六日御神殿焼失し、氏子協議の上、小字中富町村名跡に改め再建し現在鎮座す。明治六年村社に列す。（『神奈川県神社誌』）

田村用水（にしかわ）

五月の節句の時期が過ぎて
六月の田植えの季節が過ぎると
我ら子どもたちの
待ちに待った夏が来る

豪農小塩家屋敷の西側
うなぎやの裏手を流れる田村用水（注1）は
我らの夏の 絶好の遊び場であった
「にしかわ」と呼ぶ用水堀は
幅四メートル程の用水堀で
近世から水争いが絶えることのなかった
灌漑用水であったが

戸田地内にあった三か所の堰場は（注2）は
我らの子ども時代にも変わらずにあった
堰場は長さ四メートル 幅三十センチ
厚さ六センチの 堰板が
太い鎖に繋がれていた

橋の架かる手前に堰場（注3）があり
引水口にかからない水位で
堰板が嵌めてあったが
外された堰板がゴトン、ゴトンと
ぶつかり合う音を出していた

「お〜い、堰をするから手伝え」と
泳ぎに来た上級生の誰か
叫んだ
まだ されている堰板の水位では
泳ぐのに足りない
流れに逆らい 重い堰板を
みんなで懸命に嵌め込んだ
堰止められた水は
みるみるうちに いっぱいになった
しばらく 橋から飛び込んだり
潜って 足を引っ張ったり
ふざけ合って 遊んでいた
足の裏に触れるしじみ 蛭や
足に絡む水藻を感じながら
泳ぎに興じていた

「誰が、堰をした」
「勝手に堰をするんじゃ、ねえ」
突然 大人の怒鳴り声がした

堰番が鳶口をもって
堰板を外した
いまは 絶えず流れている
用水堀はない

暗渠排水によって
田にいつも水がなくてもよくなり
かつてあった用水堀は地下に
埋められ 外見上の堀はなくなったが
当時は あかっぱら（オイカワ）やナマズなど
魚の種類も多く
子どもたちにとっては 泳ぐ以外にも
「にしかわ」は魅惑に満ちたものであった

家の豊かさが「米倉に積まれた米俵で
はかられた時代」は
もう 過ぎ去ってしまったが
その農村風景は いまも脳裏に
鮮やかに 残っている

「にしかわ」に接していた
八幡神社裏手の池にいた
がちょう
赤い百日紅の花が水面に
垂れ下がっていた
夏の 水遊びの風景は
いまも 我らのなかに
生きて 動いている

注1 田村用水は田村堀ともいう。愛甲郡妻田村（現厚木市）地先の小鮎川より堰入れ、岡田村、戸田村（現厚木市）、大神村、田村（現平塚市）の四か村が、この用水を利用した。

注2 田村用水絵図参照。

注3 ニノ堰と呼ぶ堰場

注4 戸田は夜水、大神、田村は一日替りの昼水と決まっていた引水慣行は、いまも同じ。

絵図 田村用水絵図（寛文3年）写し（戸田・高瀬福蔵氏所蔵）

第二部 稲藁の籠

稲藁の籠

その日は曇っていたか晴れていたか？

空の色はどんなだったか？

それは知らない

おれは確か籠のなかに

紐で結わかれた格好で入れられていた

なんで？そんななかに入れられていたのか？

はいはいをして 逃げないため

振り時計の柱にもう一方の紐が

括りつけてあった

何人かの笑い声が聞こえた

囲炉裏には真っ黒に光るヤカンが吊るされ

煙の匂いがたちこめていた

母は弟を産むと間もなくして

亡くなった

その時 母はそこに居たのか？

居なかったのか？

父は その時どこに居たのか？

それは知らない

おれは稲藁の籠のなかに入れられていた

母が亡くなり伯父伯母祖母が

おれたちの面倒をみた

父は傷痍軍人として陸軍病院から

この家に帰ってきて

いとこ同士の母と結婚し

やがて おれが生まれ

弟が生まれた

この家の離れの部屋に住んでいた

父母は純然たるこの家の
主人であった
最初伯父伯母には子どもがなく
おれが父たちの兄弟のなかで
最初の子どもとなった
伯父も伯母も祖母も
おれを我が子のように
可愛がった

父と母が育ったこの家の柱の
匂いのなかに
おれが置かれていた
土間の鶏が餌をついばみ
玉葱が転がっていた土間に
麦藁の焼けた囲炉裏の匂い
昔ながらの家の風景
それがおれ自身の幼い日の風景
稲藁で編んだオヒツの籠に
入れられていたおれ
それが記憶のなかにある
生を享けて初めて触れた感触で
おれのもう一つの産みの母であった

おれは母を知らない
母はおれと弟と父を残して
若くして亡くなった
近衛工兵としての兄も
敵前渡河の戦闘で戦死した
祖母は長男の兄を戦争で亡くし
弟の父を傷痍軍人にした無念さを
このおれに向けていたのだらう
しかも
何よりも頼りにしていた兄の戦死の報の
傷も癒えぬままに
弟の嫁さえも若くして死なせた
その言いようのない無念さが

おれへの「愛」となった
海軍火薬廠にもう一人の兄がいた
その兄が同じ会計部の
名花といわれたタイピストと
知り合い結婚した
それが伯母
さあ、これからという戦後史の
一ページのなかに
おれが置かれていた

長男の戦死した兄に代わって
家を継いだ伯父
弟の父と伯母そして母
それがおれの稲藁の籠
おれが生まれて初めて触れた
稲藁の籠

外便所

外便所（そとべんじょ）
そんな言葉を聞いたことがあるだろうか
そう、外にある便所である
戸田の家の外便所は
昔の馬小屋の傍にあった
木の板が打ち付けてある
粗末なものであった
戸を開けて中に入るとそこは薄暗い
板の隙間から外が見える
光りが差し込み模様をつくっていた
前の箱に無造作に新聞紙が
切って置いてある
それを用を足す前に

揉みほぐす
硬い紙が痛いから

外で野良仕事をして帰ると
いつも決まったように
伯父がそこに入った
煙草を吸ってなかなか出てこない
「まだ～」と声をかけると
「ばか、外でしろ」と言う
外便所は何回も使った
尖った葉の中心に
螺旋状に伸びた白い花が
その外便所の前に植えてあった
用を足す時には
ここでは機敏に対応しなければ
跳ね返りが怖かった
ひょいと尻を上げる
「ぼちゃん」という音がするか
しないかのうちに
尻を上げないとひっかかる
ギーイという板の軋み音が
不気味だ

おれは
この戸田の家の外便所が
何とも懐かしい
便所の前にあった白い花と
尖った葉の何と純真な姿よ
足下の板の下の穴底の
何という不気味さよ
煙草の匂いと何時までも出て来ない
伯父
時間が過ぎ去って
もう戻ることができないのだという
焦り
この気持ちは「何？」なのだろう

便所の臭い臭いさえもが
こんなにも懐かしいものであるとは！
伯父よ もう一度おれに
顔を見せてくれよ
そして「ばか、外でしろ！」と
もう一度言ってみてくれよ

遠く遠く 過ぎ去って
もう再び帰って来ない
あの日々
おれは何時も外便所を思い出すと
決まってあの白い花を思い出す
便所の傍に咲いていた
ユッカの花を

稲こぎ

遠い日のことだが
つい最近のように思える稲こぎ
屋敷一面に稲がうず高く積まれ
筵の上には籾殻や脱穀した後の
穂があちこちに散らばっていた

ある晴れた日一日中やった稲こぎのこと
その日は 伯父たちの笑い声が賑やかで
父の甲高い声も聞こえた
子どもたちの一団も
脱穀機の前に横にと騒ぎ回っていた
そのなかにおれもいた

小学校高学年になった頃か
「おい、やってみろ」と父が

おれに言った
稲束を持ってそれを回しながら
何回も足で踏んだ
ギューコギューコと足を踏むたびに
稲をもった束がはじいた
数回踏んだだけで疲れてくる
「何だ もう終わりか」と父や
伯父たちの声が飛んだ

脱穀をし終わった稲の束を
手際よく くるりと結わく
それを父たちはリヤカーに積み
屋敷の外に積み上げる
昔から季節ごとに繰り返された営み

後ろが破れたシャツを着て
麦藁帽子を被った父が
にこやかに笑っている
確かに そんな写真を見た
父の若い頃の一枚の写真
どこの家でもあった昔の風景だが
いまはもう
どこにも見るができない
その時父は確かに笑っていた
おれのなかにある最初に出会った
父の面影
それが稲こぎの風景

柿の木の風景

稲藁がパチパチと燃える音がしていた
盆の送り火

蝉とりやザリガニとりに夢中になっていた
幼い頃の夏の思い出
金兵衛さん（屋号）の牛小屋
八幡さんの御神楽殿
西川（田村用水）の傍の
ガチョウがいた池
そこに咲いていた真っ赤な百日紅の花
戸田に育ち伯父や伯母
そして祖母や父母がいた家
柿の木の風景

記憶の底にある母の葬式
福蔵院の墓の傍らにあった
大きな柿の木
「おんの母ちゃんが
ジャンボジャンボ逝っちゃった」と
泣いていたという3歳の頃
あの時から何年が過ぎたというのか
小さい頃祖母に連れられて
出かけた菊田屋（屋号）前の
サンゴジュの道
あれからどれほどの道を歩いたと
いうのか
菊田屋の向かい側は竹藪で
赤くなったサンゴジュの実を
道を歩き乍ら挽ぎ取った
あの時手を引かれて行った祖母も
母も もういない
あれもこれもみな幼き頃の思い出

秋が来て 冬が来る
盆が来て 盆が去る

稲藁を燃やすパチパチという
音が聞こえた
屋敷の隅で

赤く燃え盛る火を見ていた
「ご先祖さまが牛や馬に乗って
帰って来るのだから」と
祖母が言う
「母もきっと家に帰って
来たのだ」と
おれは思う
浴衣を着て盆踊りから
帰った夜
蚊帳のなかで祖母は
いつもの昔話をした
柿の木の風景

真っ赤に熟れた柿の実が
障子に影を映してた
冬の風が吹いていた
廊下のばあさん咳をした
幼き日々の思い出は
柿を見るたび思い出す

搾りたての湯気立つ乳を
牛小屋から運んで来た
伯父の笑顔が目に浮ぶ
幼き日々の思い出は
柿を見るたび思い出す

冬の最中の西川で
大根洗う伯母の手に
流れた草が絡まった
幼き日々の思い出は
柿を見るたび思い出す

母の面影

稲藁に寝そべって見た
あの日の あの空の雲を忘れない
亡き母の面影を追っていた
幼い頃の 戸田の風景

おれの記憶のなかの
どこを探しても 母はいない
思い出に出てくるのは
いつも祖母や伯父伯母
だから
おれの記憶のなかの歴史は
閉ざされた扉を今も開けない
考えてみる
一生懸命に 考えてみる
いったいおれの稲藁の籠は
どこにあるのだろうか

母に抱かれた記憶もない
微かに思い出されるのは
誰かの着物の裾をしっかりと
握っていた
あの葬式の風景と
ゆらゆらと立ち上る煙
風呂に薪をくべていた
温かな優しそうな母の面影
それが確か母であったのかは
わからない
記憶の底を探していけば
きっと母に抱かれた感触を
思い出すかもしれないと
稲藁の記憶のなかの
母が居た頃の懐かしい風景を
探していた

あの空を見ながら
流れる雲の先の
懐かしい思い出を
じっと心のなかに押し込んで
耐えていた
幼い頃のあの空の風景を
忘れない

もう一步で
おれの記憶のなかに
しっかりと刻まれたであろう
母との思い出も
幼すぎたおれには
何も解かろう筈もない
母に抱かれた感触は
この時以来永遠に
触れることのできない
彼岸の向こうへと消えた（注）

産まれた時入れられていた
稲藁の籠は
囲炉裏の傍の
柱時計の柱に結わかれた紐で
結ばれていた
その先に風呂場があって
そこで薪をくべていた人が
おぼろげながら思い出す
母の面影
祖母や伯母たちは
その時何をしていたのか
はっきりと解かるだろうが
おれの記憶には
これしか母の記憶はない

それが
おれの稲藁の籠

懐かしい母の思い出

(注) 母はおれが3歳、弟が2歳の時に亡くなった。享年24歳であった。

離れの部屋

母がまだ元気だった頃
母屋の西側の裏手に
父母たちが暮らしていた
 離れの部屋があった
最初 この部屋に父母たちが住み
その後 父の弟の部屋になり
やがて 伯父夫婦の部屋になった

離れの部屋の前にあった大きな柿の木
その部屋の開き戸には
開き戸と同じ寸法の縁側が備え
 つけてあった
そこは格好な日向ぼっこの
場所でもあったが
母屋と廊下でつながっている
離れの部屋が
父と母の最初の住まいであった

開き戸の前の縁側に
綿入れの襦袢を着て
立っている3歳の頃の
一枚の写真がある
何をしているのだろうと
きょとんとした眼差しで
こちらを覗き込むような不思議な
顔のおれが 写っている

母が撮ったものだろうが
「ほら、こっちを向いてごらん」と
そのとき母はおれに向って
叫んだのだろうか

離れの部屋の前の柿の木の大きな枝が
空に向かって伸び
その枝には無数ともいえる
柿の実がなっていた
明るい日差しが注いでいる
冬の日　まだ母が元気だった頃の
写真のなかに
子を思う親の想いが
おぼろげに覗い知れる
母の眼が見つめる先に
おれがいた

いま自分が　どのような場所において
何が　そこに始まっているのか
誰が　自分を注視していたのかも
知らずに
その時のおのれの生誕の謎も
解らずにいたおれ

母屋の西側にあって
離れの裏手の囲まれた
場所にあった柿の木の下に
幼い頃　父母と過ごした
部屋があった
板張りの向こうの
縁側には蒸籠せいろうの湯気の
立ち込めた
餅つきの風景があった
父と母が慣れ住んだ
懐かしい離れの部屋は
大きな柿の木と

母屋につながる廊下で
結ばれていた
その縁側で日向ぼっこをしている
おれがそこにいた

キャンデーやさん

カド（屋号）の堀の前の道が
曲がる角のところに
竹鉄砲に丁度いい竹が
生えた生垣があった
土間の奥の彫りぬき井戸の手前に
台所の包丁が挿してあった
その包丁を持ち出して竹を切っていた
その時 生垣の間から
キャンデーやさんがカドを曲がりかけたのが
見えた
「おばあ、キャンデーやさんが来たから
カネくれろ」こう叫んで
キャンデーやさんを追いかけて
急いで走ってキャンデーを買った
自転車の荷台に括り付けてあった
箱からおじさんが
キャンデーを一本くれた
当時一本五円かであった
一本のキャンデーは乾いた喉を
潤した
自転車が通り過ぎると
また途中だった竹鉄砲をつくり出した

あの子どもの頃は
己の置かれている位置も

立場も 何も考えることもなく
何の気遣いも 不安もなく
ただ目の前の遊びに興じていた
まるで 目の前のことが
この世のすべてであるように
無心であった
おれにとって遊びに興じる友がいた
そのことが 日常の
当たり前の出来事だった
だから そこに不安もない
何の拘束も 不安もなく
思う存分遊ぶことに夢中になれた
幼い頃の 自由な時代

鐘を鳴らしながら
遠くへと走り去った
キャンデー屋さんの自転車
いつも 祖母がいた
幼い頃の 夏の風景

相川村役場

昭和22年（1947）8月
伯父は中郡相川村助役となった
その後 昭和29年（1954）9月相川村最後の
村長に就任し 厚木市に合併するまでの
8年間は 伯父の生涯にとっても
最も輝いた時代であった
だが その時代はまた
おれが戸田で過ごしていた
最も懐かしい時代でもあった

酒井にあった 村役場は
伯父に連れられて何度も出かけたが
役場は木造で
玄関の入り口前には
桜の木が植えられていて
入ると直ぐに階段があつて
2階に上がると
そこが伯父の部屋になっていた

おれは役場の前の
木の傍で
石遊びなどをして一人で
遊んでいた

その時も
おれは伯父の役場にいた
いつの間にか居なくなったおれが
役場で用務員のおばさんと
遊んでいるのを やつとのこと
探しあてたとき
「きっと、みのるも寂しかったの
だろうよ」と伯母たちは
話したというが
「炬燵に入っていたが
しばらくして見に行くと
おれが居ないのに気づき
大騒ぎになった」と言う
その日の出来事
遊びに興じると
夢中になってしまう性格はこの頃から
身についたのか
村役場で おれは発見された（注）

当時 蓮田はあちこちにあつたが
道を歩きながら蓮田の中を

覗くとザリガニが逃げていく
そのザリガニを捕まえようと
沼の中に足を突っ込む
手で ザリガニを掴み
道端へと投げる
道の真ん中で
のそのそとザリガニが歩いていた
シンや（屋号）のおじさんが
「蓮田でのそのそと動いているのを
見たらみのるちゃんだったので
連れて来た」と泥だらけのおれを
抱き抱えてきたときのことを
伯父や伯母は
「シンやの前の蓮田におまえがいてなあ」と
愉快そうに笑う
そのときのもう一つの話に
村役場に居た
おれの話が出た

幼き日 無心で遊びに興じていた
あの頃こそが
何の悩みも苦しみもなく笑顔でいられた
唯一の時代であった
これも 故郷に抱かれていた
幼い頃の懐かしい風景

（注）小学校三年生の時、大磯海岸にクラス遠足に出かけた。この時も、みんなが帰ったのも知らずに、一人ヤドカリ獲りに夢中になり大騒ぎとなった。結局、歩いて家まで帰っていることが分かり、この事件は終わった。

麦踏み

ある冬の早朝に
祖母と麦踏みに出かけた
隣家のまーちゃんと祖母
そして おれであった
まーちゃんは祖母がとても
可愛がっていた高瀬家の娘で
いつも祖母が手を引いて
歩いていた

その日もまーちゃんと
一緒だった
祖母が「行くよ」と言うので
ついていったが
そこが「外畑」と呼ぶ畑であった
湯気が ゆらゆらと上がっていた
朝の陽射しが差し込めていた
畑の端から
「さあ、やるよ」と祖母が言って
麦踏みが始まった

小高い丘のような
畑に麦が並んでいた
「ついておいで」と
祖母が言うので
まーちゃんと祖母の
真似をして後ろから
麦を踏んだ
おれにはお姉ちゃんと
一緒なのが嬉しかった
まーちゃんは
綺麗な女の子で
5歳も歳上だったが
おれの面倒もよくみてくれた
おれにとっては

優しいおねえちゃんであった

そのまーこちゃんも
2人の息子が高校生になった頃に
若くして亡くなった

麦踏みに出かけた朝のことを
今も 時々思い出す
まーこちゃんの姿と共に
祖母と過ごした
幼い頃の風景は
おれのなかに消えないで
残っている

蝉

或る夏の日みんなで蝉とりに出かけた
「盆の蝉はとっちゃあ、いけねえ。
蝉は3日しか生きられねえんだから
逃がしてやんな。」と
祖母は 蝉をとってきた時
そんなことを言った
3日しか 生きられない蝉
3年しか 暮らせなかった母
夏はおれにとって
盆の送り火
盆の^{かがりび}篝火

おれが母と過ごした3年間の記憶は
殆ど思い出さない
記憶の底に沈められて

忘れ去られている

「蝉は、ご先祖さんかも知れねえよ。」

と言う 祖母の言葉に

母のことを想った

記憶というのは底に沈められても

時々ふとしたところで

蘇るものだろうか

急に懐かしさが込み上げて

いたたまれないときがある

蝉よ 知っているのなら

その訳を 教えておくれ

蝉とりには

蜘蛛の糸を使った

竹竿の先に針金の輪をつくり

蜘蛛の糸を そこに巻いた

まるで蜘蛛が獲物を

とらえる時のように

蝉をつかまえた

夏の思い出は

蝉とりの思い出

記憶の底に沈んだ

懐かしい母の思い出

第三部 うなぎや

うなぎ池

万延元年（1860）3月3日

桜田門外で大老・井伊直弼が暗殺された事件

桜田門外の変が 起こった

「私は井伊の殿さまが殺された

前の年に産まれたんだよ。」

とヨネは よく子どもたちに

話したと言う

そのヨネの話によると

「うなぎ池が

洪水で流されて鰻が

逃げた時は大変だった」

と 昔話をした

うなぎ池の話から

家の屋号の「うなぎや」の

由来がわかる

西川沿いに

うなぎ池が幾つもあって

担ぎ屋と呼ばれる

人たちによって

鰻は店へと運ばれたという

「おれも担がせてもらったよ。」

という人に

伯父は実際 会ったという

鰻の仲介業をやっていて

多い時は数人の担ぎやで

賑わっていたという

屋号「うなぎや」に秘められた
先祖の歴史

四代目の当主であった
治兵衛の代に
うなぎやは最も繁盛したが
ヨネが語ったように
文久2年（1862）8月の
洪水でうなぎ池は
壊滅した

五代目の由右衛門の代に
うなぎやは廃業となった

ヨネの話は
先代の話であったが
その後も 屋号は語り継がれ
いつも「うなぎや」の屋号で
呼ばれていた幼い頃の
屋号の話
うなぎ池の昔話

駕籠かきの伝説

屋号「うなぎや」にまつわる話に
駕籠かき（注）の伝説がある
玉葱が転がる土間の
黒光りする柱に 寄りかかって
その時 祖母の昔話を聞いた
それは祖母が
「嫁入りした時に聞いた話」と
いう
「昔、岩崎の先祖の人が

加賀さまの行列の前を横切った
駕籠かきを殺した
そのことで、先祖の人は
大変苦しまれた」と
祖母は 話をした
「これは他人さまには
絶対に口外してはならない話だ」と
先祖から聞いたという

「それじゃあ、うちの先祖は
サムライ だったんけえ。」と
おれは 祖母に聞き返した
「さあ、どうかねえ」と
祖母はその時言った
祖母は それ以外のことを
幾ら聞いても
「おれは 知らねえ」と
答えてはくれなかった

戸田の延命寺付近の地名に
「加賀屋敷」の地名がある
その隣に「堀の内」という
地名があって
そこは「昔の豪族の屋敷跡」と
伝えられている

屋号を「下屋敷」と呼んでいる
下戸田辺に
大きなクヌギの木があった
そのクヌギの巨木は
根元が二股に
分かれていて
その根元は 柔らかかで
落ちた葉が重なり
カブトムシがいたが
何となく 地名のような

古めかしい 不気味さを
漂わせていて

幼い頃

カブトムシを獲りに行く時
いつも恐ろしい感じがして
足早に 通り過ぎた

そんな記憶が残る

加賀屋敷と

駕籠^{かき}昇きの伝説

(注) 駕籠を担ぐ人を「駕籠^{かき}き」と呼んだ。

加賀屋敷

宝永2年(1706)の富士山の噴火と

その降灰がもたらした

酒匂川流域と小田原藩領内の

荒廃による復旧策として

幕府が行った知行替えによって

天保14年(1843)2月

戸田の一地域が

小田原藩領となった

その時の「加賀屋敷跡」と

一説にはある

「堀の内」とその外側にあった

「外畑」という地名など

この地域は いまも謎に

包まれている

戸田の領主たちの歴代の屋敷が

堀の内にあったが

弘治2年（1556）3月
伊波氏館も
ここにあった
永禄年間（1558～1569）に
伊波氏は没落したが
その跡目を継いだのが池田孫左衛門で
池田氏館は 沖小柳へ移された
寄親を失ったかつての寄子衆たちは
福蔵院の古くからの檀家で
伊波氏と姻戚関係をもつ
一族であった
うなぎやの先祖は
「加古岩崎」にまで遡る
戦国期からの家柄で
伊波の領地大井宮分の末裔
伊波氏と共に
戸田の地へと辿り着いた

天正18年（1590）
豊臣秀吉の北条氏攻略に際し
その軍勢が沖小柳に乱入し
池田氏館や福蔵院
民家などを 焼き払った
後北条氏滅亡後
池田孫左衛門の子孫たちは
戸田の地を離れ農民となり
片岡から広川へ移り住んだと
古文書は 伝えている

相模川堤の松林

戸田の伝承によると

相模川堤の松林は
うなぎやの先祖が植えたものだと
伝えられている

かつて相模川は洪水に
幾度も見舞われた
その度毎に 相模川堤の
改修工事が繰り返された
相模川流域の村々は
繰り返される洪水被害に
防水林として 松を植えて
相模川堤を整備した
近世期の修復絵図が
残されている

松の間の間に
帆掛け舟が行き交うのが
見えたという相模川堤の松林
「相州大山街道戸田川ノ渡」
広重の扇子絵に描かれていた
松林
その松を植えたのが
うなぎやの先祖の
治兵衛という人であったという
うなぎやの先祖にまつわる話を
いま語る人はいない
幾度も繰り返された
洪水の凄まじさも
忘れ去られて
相模川堤の松林も
いま一本もない

慟哭・本所被服廠

大正12年（1923）9月1日
午前11時58分
関東大震災が発生した
火の海の中を逃げて
ふと背負った我が子を見ると
熱風に晒されたのか
すでに息絶えていた
我が子を置いて立ち去ろうとしたが
どうしても 立ち去り難く
死んだ我が子を見返すと
「行かないで、行っちゃあ嫌だ」と
叫ぶように
武之が決まって鼻血を出したと
祖母は語った

火の海の中を
昔使っていた小僧が
水を汲みに行ってくれたり
助けてくれた
そのお礼も言わずに
別れたことが悔やみきれないと
祖母は 繰り返して話していた
身籠っていた祖母は
火傷を負いながらも
実家へと辿り着き
そこで 母を出産した

夫松之助のことが気になってはいたが
その消息は 絶えたままで
遺骸もなく その死さえも
確かめられず 兄の博は父と共に
本所被服廠で 亡くなった
祖母が 東京に行く時には
必ず本所の被服廠に行ったが

「ほら、あそこに荷車があるだろう
そこが 家があった所だよ」と
指差して言ったという
祖母は母との二人生活の中で
震災から15年後
昭和13年（1938）9月23日に
病没した
母が15歳になった時であった

授業参観

祖父房吉はよく
ひょっこりと 散歩がてらに
子どもたちの学校へ出かけた
いまとは違い「授業参観」など
なかった時代に
小学校の教室に入り
椅子を引いて後ろに座り
子どもたちの授業を
じっと見ていたという
胃癌の術後の頃の
祖父の晩年の出来事という
祖父は どんな気持ちで
学校に 来たのだろう

よっぽどのことがないと
親が学校などに来ることが
なかった時代に
親父が「授業参観」に来た
「おまえたちよ
頑張れ！
おれはもうこの先永くはないが
おまえたちは違う

一種懸命勉強して
大きくなれよ！」と
そんな気持ちだったのか
「おれに カネがあったら
総理大臣でも 何にでも
なってやる！」と豪語していた祖父の
子どもに託した希望と優しさが
どこにあったのかが 窺い知れる
祖父晩年の出来事

戦死地点・正陽関

昭和13年（1938）6月14日
「コウヘイグンソウイワサキセウジ
六ツキ九ヒナカシナセイヨウカンフキンニテ
ソウレツナルセンシオトグ
コノエコウヘイタイ」
（工兵軍曹岩崎昌治
六月九日中支那正陽関にて
壮烈なる戦死を遂ぐ
近衛工兵隊）
戦死電報が 家に届いた
その前に 弔電が届いていた
「謹みて哀悼の意を表す」

最初にその弔電を受け取ったのは
昌治の妹信子だった
それを祖母に見せると
「清を呼んでこう！」と
妹を畑へと走らせた
当時麦刈りの時期で
弟清は畑にいた
妹から弔電のことを聞いた清は

泣きながら家へと 走った
その速さは凄まじかった
「おれがいくら走っても
追いつけなかった」と
叔母は戦死電報が届いた日のことを
話した

そんな時よ、おばあさんが言ったよ。
「あんな元気に出ていった
兄ちゃんが、こんな紙切れ一枚で
誰が死んだと思えるか！」と
だが 死は冷厳な事実であった

岩崎昌治が戦死した地点の正陽関（注）は
麦畑が広がっている
のどかな農村地帯である

安徽省淮河支流の正陽関より
上流の楊家脳の対岸へ
第一線部隊を渡河せんと
9日午前2時を期して一斉に渡河を開始
対岸よりの敵の機関銃攻撃のなか
1回2回と渡河は進められたが
第3回目が正に対岸に着こうとした時
銃弾を右肩より左胸下に
貫通銃創を受け戦死した
27歳であった

（注）正陽関（せいようかん）長兄昌治の戦死地点。中国安徽省中西部、寿县南西方の要地。淮河（わいがわ）、颍河（えいがわ）、潁河（ひがわ）の合流地点。

海軍火薬廠会計部

長兄昌治が戦死した1年後

あとを追うようにして祖父房吉が
胃癌で亡くなった
孝治がうなぎやの家を継いだのは
昭和14年（1939）7月だった
孝治は 昭和4年4月
海軍火薬廠見習養成所に第9期生として
入廠し 卒業と同時に
会計部に配属された
昭和18年平塚より海軍艦政本部に移り
昭和20年の廃廠に至るまでの17年間に
海軍火薬廠で過ごした

伯母と知り合い結婚したのは
昭和17年 孝治が28歳の時であった
「会計部は庁舎内にあった。
正門を入ると守衛がいて
「札場」という所で出勤の札を裏返し
引込み線をこえて会計部まで行った。
会計部には「購買窓口」というのがあり
その窓から外を覗き
接客をしていた。
会計部には庶務・営繕・給与・工費
工事費とあった。
タイピストの机は窓側にあり、
廠長室が見えた。
一ヶ月に一回、廠長室の金庫が
開けられたが、
その金庫の中には“金塊”が入っていた。
窓際から それを見て
大騒ぎをした。」と
会計部でタイピストをしていた時のことを
伯母は話した

伯母は「会計部の花」と呼ばれていた（注）
「伯父と結婚したが
農家の嫁になる積もりはなかった。」

と言う
「初めて田んぼに入った時に
ヒールに血を吸われて
田んぼに入るのが嫌で
泣いていた。」と
伯母は 結婚当時を振り返る
伯父にとって海軍火薬廠の時代こそが
青春時代であったのだろうか
伯父の結婚の一年後
昭和18年（1943）弟忠治が結婚して
うなぎやの家に住み
伯父や父たちの時代は
結婚を期に 戦後へと
突き進む
（注）和田良助著『海軍会計部追想録』

戦後史の一ページ

父忠治は 昭和15年（1940）7月
武城東門臨清付近を警備中に
敵の奇襲に遭って
父の第二分隊は敵に包囲され
殆どが 殺られた
父は足を手榴弾でやられ
靴のまま足がぶらぶらしていた
直ぐに軍医を呼び
臨港野戦病院に運んだ
敵は師団司令部近くに
置いてあった自動車に火をつけ
それが燃えていたと
戦友が語る
父は野戦病院で左下腿部を 切断され
傷痍軍人となった

8月 北京陸軍病院に護送され
10月 内地送還となる
昭和16年4月 甲府陸軍病院にて
兵役を免除され退院した
家に帰ってから2年後の
昭和18年(1943) いとこ同士であった
母の直子と結婚し離れでの生活を始めた
父と母の新生活の出発は離れの部屋から
始められた

戦後復興の呼び声のもとに
初められた七夕祭りに
父の肩車で町を歩いていたら
そこにアコーディオンを
弾きながら物乞いをする傷痍軍人がいた
「あの人たちは、自分の力では何も
できない人たちだ。何事も他人のせいにして
墮落した人たちだ。」と
吐き捨てるように
父が言った言葉を いま思い出す
「片足とはいえ自分で立って歩こうとしない
人たち」を父は許せなかったのであろう
父の戦後復興への決意をそこに見た
父たちの戦後史の一ページは
この覚悟によって
切り開かれた

相川診療所開設

昭和22年(1947) 1月18日
母は病死した
その母の死をきっかけとして

無医村の悲惨さを実感した伯父たちは
相川診療所の開設運動を始めた
昭和24年（1949）7月1日
念願が叶って相川診療所が開設された
伯父の助役就任から
2年後のことであった

母の容態が急変したことを
心配して父が離れの部屋から
伯父たちを呼び
病院に連れていこうとしたが
相川村も周辺の村にも病院がなく
しかたがなく
母をリヤカーに乗せ
平塚の共済病院に行くことにしたが
途中の田村まで行った所で
母の容態が悪くなり
近くの沖津医院で診てもらったが
すでに手遅れで
病死してしまう
伯父と一番下の弟は
家に連絡をしながらの
搬送だったと言う
母はまだ24歳の若さであったが
手当てもかなわず
病死させてしまったことが
伯父たちに衝撃を与え
そのことが無医村をなくするという
診療所開設の悲願へと
導いた
これもまた戦後史のなかある
一ページに違いない